

みのじのみ^{まつり}のり祭

1989（平成元）年から始まった新しい祭りで、毎年9月の第4土曜、日曜日に開催される市内最大のイベント。延べ200軒のU字溝の炭火で焼く焼きマツタケ、市内13町に伝わる伝統料理や地元で採れる山菜、野菜などを使った料理を一堂に集め、販売や試食が楽しめるふるさとまちじまんコーナーが中心的行事。また、自治会や企業、友人グループなどが作るユニークな創作御輿が市街地を練り歩き、祭りの夜を盛り上げる。このほかにも、さまざまなイベントが盛りだくさん。毎年市内外から10万人を超える多くの人を訪れる。



名物の焼きマツタケ

ひとくちメモ

- 以前は皇女和宮の行列を再現した催しがメインの「恵那ふるさと祭」が開催されていたが、恵那の祭りとして定着するにはいま一歩だった。恵那の知名度を高めることで、郷土に誇りを持つ人が増えることを願って再構築されたのがこの祭り。

関連項目

なのかふくいち 七日福市

お正月の七日に開催される大井町の市神神社の縁日で、三百有余年の伝統を誇る。通称七日市と呼ばれている。この日は、恵那駅前から市神神社を結ぶ通りに多くの露店が立ち並び、毎年数万人の人で大にぎわいとなる。市神神社は福の神とされ、七日市にはお札さまを迎えて、1年間の家内安全と商売繁盛を祈る。



にぎわう市神神社前

ひとくちメモ

- かつて市神神社があったといわれる大井町上宿付近は良質なタバコを産出しており、毎年1月7日にはたばこ市が開催されていた。現在の七日市は、ここから始まったと伝えられている。

関連項目

- 中山道（P8）
- 大井宿（P9）

じかぶき 地歌舞伎

地芝居のうちでも農民など素人が演じる歌舞伎を特に地歌舞伎と呼ぶ。日本三大地歌舞伎の里と呼ばれるここ東濃地方。その始まりは江戸時代ともいわれ、地域の保存会、小学生によりその伝統は脈々と受け継がれている。地歌舞伎の再興と伝承に尽力された地芝居振付師松本団升、中村高女という二人の指導者を擁し、串原歌舞伎、山岡歌舞伎が市の指定文化財となっているほか、東野、三郷、飯地、明智、上矢作でも地歌舞伎が盛ん。また、飯地町の五毛座ごもうざや三郷町の宮盛座みやもりざといった芝居小屋も現存し、まさに地歌舞伎日本一といえる。



地歌舞伎

ひとくちメモ

- 日本三大地歌舞伎には中山道美濃の国のここ美濃
- 歌舞伎のほかに、小田原を中心とした相模地方の
- 相模歌舞伎、西国より京に至る事実上山陽道の
- 終点ともいえる播磨はりまの国（現在の兵庫県）の播州
- 歌舞伎がある。

関連項目

- 中川とも (P14) ・ 松本団升 (P15)
- 五毛座 (P27)

おおいぶんらく 大井文楽

阿波あわ（徳島県）の人形細工師、初代天狗屋久吉てんぐやひさきちの作品を使った人形浄瑠璃じょうるり。1949（昭和24）年、名古屋の近松座から人形首かしらを譲り受け、大井町の有志らが「大井文楽同好会」を結成。しかし、娯楽の多様化や会員の高齢化により一時は解散の道を歩む。その後、後継者育成や保存会結成に取り組む中で、1989（平成元）年、現在の「大井文楽保存会」が発足。市内外を問わず積極的な公演活動を行い、先人が残したかけがえのない文化遺産を今に伝えている。人形首34個のうち、21個は初代天狗屋久吉の作品で岐阜県重要有形民俗文化財に、残る首は久吉の弟子たちの作品で、うち11個は市の有形民俗文化財に指定されている。



大井文楽

ひとくちメモ

- 大井文楽の人形首は、阿波系のもので、大阪
- 文楽やその流れをくむ県内の真桑文楽や半原文楽
- などの人形より一回り大きいのが特徴。頭の部分の
- 直径が大きなものでは21センチセンチもある。見栄えはする
- が、人形が重くて遣う人にとっては大変である。

関連項目

なか やま だい こ
中山太鼓

串原総氏神中山神社の祭礼で奉納される太鼓。大太鼓はキリ製のスリコギ形のパチを、締め太鼓は竹製のパチを使って、各組が長時間たたく勇壮な太鼓。その由来は、豊年祝いまたは雨乞いの祈願が発祥とされるが定かでない。1574（天正2）年、武田軍の美濃侵攻に際して、迎え討った織田軍の将串原弥左衛門配下の武士たちは、大太鼓を拳で、締め太鼓を焼き清めた矢で打ち鳴らし武運を祈願したという。毎年10月の第3日曜日に奉納され、県の重要無形民俗文化財に指定されている。初めは一人の打ち手から、やがて一節毎に打ち手が交替しながら打つ「回り打ち」に変化。その「回り打ち」の輪が、ついには一つになる姿は圧巻。



中山太鼓

ひとくちメモ

- 中山太鼓保存会は、1977（昭和52）年に結成された。過去には、国立劇場「日本の太鼓」、大阪「花の万博」、愛知「愛・地球博」、また1999（平成11）年には、アジア国際文化交流事業の一環として、マレーシアで演奏を披露した。

関連項目

いわ むら ちょう し し まい
岩村町獅子舞

江戸時代に発祥したと伝わる民俗芸能で、武士や町人でない岩村城下町の農村部*入り四郷（現在の一色、領家、大通寺、山上）によって保存伝承されてきた県指定の重要無形民俗文化財。雌獅子頭（女獅子）を使用し、男性が女装して舞う優雅なもので、男性が女性らしい仕草をいかに表現して舞うかというところが見せ場。現在では岩村町秋祭行事（県指定重要無形民俗文化財）の夜、かつての岩村城下町の路上数個所で獅子舞を披露し、秋祭りの夜を沸かせている。

*岩村城下町の農村部のことを「入り」とよぶ。



岩村町獅子舞

ひとくちメモ

- 演目の一つ「葛の葉姫の子別れ」では、親子、夫婦の愛情の絆の細やかさ、別離の悲しさを表すところが見どころ。さらに、雌獅子が気持ちのありったけを込めて、ふすまに墨で縦書き、横書き、逆さ文字書き等で歌を書く場面は圧巻。

関連項目

・岩村町秋祭行事（P21）

いわむら ちょう あきまつり ぎょう じ 岩村町秋祭行事

岩村町にある八幡神社と武並神社を結ぶ父子対面をテーマとした祭り。八幡神社には岩村城創築の祖加藤景廉、武並神社にはその子遠山景朝が祭られ、景廉が武士の神、景朝が町人の氏神とされていた。秋祭の神輿渡御行列は数百にも及ぶ。76役、総勢300人が行列を成し、景朝の乗った神輿を奉じて武並神社を出発。城下町を通過して父景廉の元へ向かう。一夜を過ごして、翌日は再び神輿を奉じて武並神社へ還御する。この神輿渡御は1631（寛永8）年、当時の岩村藩主松平乗寿が、武並神社を壮大な社殿に建て替えたのを機会に始めたと言われる。時代とともに若干の変化はあったものの、今も町を挙げての行事である。



岩村町秋祭行事

ひとくちメモ

- 神輿渡御行列では古式にのっとり平安朝期の衣装、直衣、烏帽子を着用した14人が雅楽を奏で、渡御を一段と荘重なものに行っている。これは、1854（安政元）年、岩村藩主松平乗喬から許しが出て、雅楽を演奏するように若者連中に達しがあったのが始まりという。

関連項目

- 岩村町獅子舞（P20）
- いわむら城址薪能（P21）
- 岩村本通り（P48）

じょう し たきぎのう いわむら城址薪能

岩村城の永い永い歴史を見守ってきた老松を背景に、かがり火を焚き、自然景観を生かした特設舞台で開催される野外能。薪能が開催される会場は、かつて岩村藩の藩主邸があった場所で、1985（昭和60）年、岩村城の築城800年を記念して地元有志が初めて開催したもの。近年になって、この会場で江戸時代の藩主が実際に能を鑑賞していたとする古文書が発見された。月の光と薪の薄明かりの中で上演される幽玄の世界は、何とも言えない趣があり、日本の伝統芸能の醍醐味を存分に味わうことができる。



いわむら城址薪能

ひとくちメモ

- 最近発見された古文書によれば、神輿渡御行列（岩村町秋祭行事）で、神輿の停泊中に藩主邸前で能狂言が催され、藩主から与えられた袴（武士の礼服）も使われていたとされる。

関連項目

- 岩村城跡（P6）
- 岩村町秋祭行事（P21）

37

弘法大師が爪で刻む

爪切地蔵尊奉納煙火

つめ きり じ ぞう そん ほう のう はな び

弘法大師一夜の作といわれる霊験あらたかな山岡町久保原爪切地蔵の伝統花火。爪切地蔵とは、高さ2尺の一枚岩に、浅い線で地蔵尊の姿が彫刻されたもので、弘法大師が爪で刻んだと伝えられる。盆の送り火としても開催される爪切地蔵の花火大会で、たいまつを使った独特の綱大仕掛け花火をはじめとする伝統花火と、現代の華やかな花火とのコントラストが微妙にからみ合い、ほかの地域の花火大会では味わえない魅力がある。最後に行われる三段式のロケット状の花火「送り火・行き別れ」は、一見の価値がある。その歴史は1720（享保5）年以前にさかのぼり、約290年の歴史と伝統技法を今日に伝える。地域の安全と五穀豊穰を祈り、約千発が打ち上げられる伝統行事で、市の重要無形民俗文化財に指定されている。



爪切地蔵尊奉納煙火

ひとくちメモ

- 爪切地蔵尊は林昌寺の門前に祭られており、その姿は大きく傾いている。昔、村人たちが地蔵尊を真
- つすぐに起こしたところ災厄病難が起こったため、真
- つすぐにすれば厄が起り、煙火の祭りを怠れば厄
- 病災難があるとも伝わる。

関連
項目

38

歌舞伎を演ずる獅子舞

下手向の獅子芝居

しも とう げ し し しば い

山岡町下手向の白山比咩神社の祭礼に演じられる奉納芸。祭礼では獅子舞による悪魔祓いを演じ、社殿の前では、おかめに神主がからむユーモラスな芸を奉納。夜には芝居小屋で悪魔祓い、さいとりさし、獅子芝居などが演じられる。現在の奉納獅子舞は、1702（元禄15）年、信州小諸藩主松平乗紀が岩村藩への国替えをきっかけに導入された嫁獅子によるものとされる。その後、いつしか余興として歌舞伎狂言のさわりの場面を獅子が演ずるものとなった。獅子芝居は神に捧げる「奉納芸」であり、県の重要無形民俗文化財に指定されている。



下手向の獅子芝居

ひとくちメモ

- 獅子舞保存会は1987（昭和62）年に発足。
- 2001（平成13）年にはニューヨークのカーネギー
- ホール、2010（平成22）年には東京の国立劇
- 場で披露した。

関連
項目

飯高観音

日本三大観音の一つで、山岡町の妙法山萬勝寺に祭られている。厄除け、災難除けの観音さまとして、近郷の尊信を集め、東濃地方で初詣といえ「飯高観音さん」と名が挙がるほど、この辺りでは有名。本尊は千手観世音菩薩で天台宗四祖（比叡山三世）慈覚大師の作と伝えられ、出身の東国へと下る道すがら、幾度もこの辺りを通ったことが想像できる。境内には千手観世音菩薩（本堂）、不動明王（不動院）、普賢菩薩（狐月坊）などの仏像が祭られている。一説にはお守りとしての「五円玉」を「御縁」として解釈し、縁結びのお寺としても人気があると聞く。



飯高観音

ひとくちメモ

- 境内には悲運の機織り娘の伝説が残る「機子ヶ池」がある。その昔、機織りの大好きな美しい娘に殿様が一目ぼれし、自分の側女にしたいと再三命じるも思い通りにならず、一族もろとも重罪に科すとされ、娘が思い余ってこの池へ身を投げたという伝説。

関連項目

光秀まつり

明智光秀誕生の伝承がある地として、名将光秀公をしのんで5月の第一日曜日に開催される明智町のお祭り。その歴史は1973（昭和48）年からを数える。物々しくも華やかな戦国武将の衣装に身を包んだ現代版「光秀」の武者行列が、光秀ゆかりの史跡が残る町を練り歩く。光秀公を先頭に、騎馬武将、少年が扮する少年武将行列、少女が扮する少女姫行列、山車が続く。山車には、司葉子大正村村長が乗るほか、明智太鼓や火縄銃の実演も披露される。



光秀まつり

ひとくちメモ

- 光秀まつりのあるこの日は、遠山氏の菩提寺である龍護寺で、光秀公の供養（仏事）が行われる。その際、年に一度この日だけ、寺宝として伝わる九条衣の袈裟（礼拝のとき床に敷く坐具のついた袈裟）が披露される。

関連項目

・司葉子（P16） ・日本大正村（P50）